

能代高

⑨

永遠の恩師

初めて制服を着た住吉忠一（2期、信用保証協会）は、いささか驚いた。

「おや、おかしな。ポケットのねえズボン？」

友だちのと同様だった。ポケットがある、手をつつ込んで、姿勢が悪くなる。そんな理由でカットしたらしい。ズボンにモノを入れられず、シワ寄せが上着に。上着のポケットはみんな、ばかにふくらんだ。

その上着も、エリにカラーをつけることができなかつた。エリの幅が狭くて、このエリに合うカラーは町で売っていないのだ。

牧野昌右工門（1期、農業）は、他校の生徒がなんともうらやましく見えた。他校の生徒は立派な革バンドをしめている。それにひきかえ、能中の生徒は布製のヒモ。ヒモでもズボンは落ちないけれど……。

「不景気だ時だをな。いろいろ儉約したつもりだべども、それにしてもな」

極めて合理的なところがあつた。下着が体操着を兼ねていて、上着さえぬげば、いつ、どこでも一、二、三……

三尺さがつて、師の影を踏まらず。いや、五尺も六尺もさがつてさえ、能中の生徒は、武藤健三郎校長の影を踏むことはなかつた。ズボンにポケットがなくても、革バンドがしめられなくても、これすべて、神様のような武藤校長の教育方針であればと、納得した。

ヒゲづら。黒い顔色。ガッチリした体格。“ススケダルマ”とは、だれが考えたのか、よくつけたものである。いまにも食いつきそうな風ぼうなので、“ゴリラ”ともいわれた。こうしたアダ名は、秋田師範学校の先生時代にすでに“製造”され、そのまま能中に伝わったともいわれている。

能代の旅館に泊まり込んで開校準備に奮闘した。天下の能中の第一歩は、武藤校長とともに始まり、能中を去るまでの約八年間、能中発展の基礎づくりになり、全力投球の毎日だった。

相沢（旧姓成田）東一（4期、県立二ツ井高教頭）が、武藤校長と初めてことばを交わしたのは入試の時である。

いよいよ口頭試問。さすがの相沢も、落ちつけなかつた。順番を呼ばれて部屋に入る。

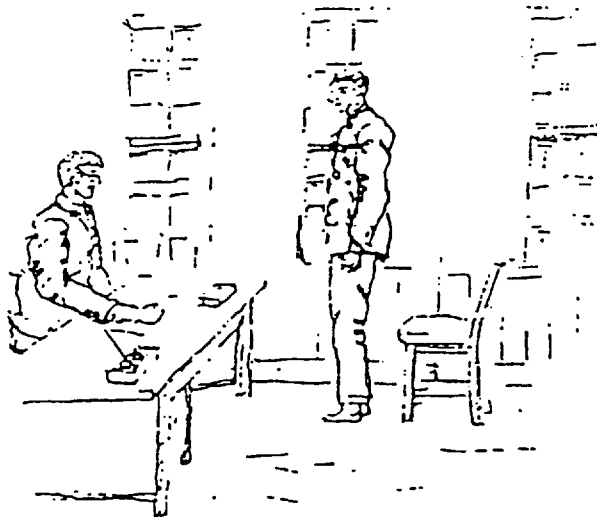
正面に、いかめしい“ダルマさん”の顔。ふと足元を見ると、一冊の本が落ちていた。ではないか。おもむろに本を拾い、それからイスに腰かけた。あとでわかつたことだが、本は、わざと落としてあつた。うっかりして拾いそこねた受験生は、いい点がもらえない仕組み。

ダルマさんが立ち上がつて、相沢に用事をたのんだ。

「キミ、タバコを買つて来てくれないか」

そういつて、背広からサイフを取り出した。おっと、ここにも一つ落とし穴。あがつている受験生は、それだけ聞くと、ハイッと、外へ飛び出して行きそうになる。校長先生のいいつけでは、本気にしないほうがおかしい。

冷静な相沢は、その時、こう聞き返した。



さし絵は戸松恭一（新11期・能代高教諭）

「どんなタバコを、何個買ってくればいいのですか？」

これで合格点。

「いや、タバコはいいんだよ」
ダルマさんは、笑いながら金をもとのサイフに戻した。

優秀な成績で通した相沢だが、入試の時以外に、武藤校長と直接口をきいた記憶がない。いかに、当時の校長が雲の上の人だったか。

教えを受けた何人かに聞いてみても、同じ答えが返ってくる。「じかにしゃべったことねかったです…」

息子が海軍兵学校に行っていた関係か、海軍のカッターを借りて来て米代川に浮かべ、生徒にこがせた。重いオールに生徒はネをあげた。

女学校に入ったばかりの娘さんに、だぶだぶの制服を着せた。これなら、卒業まで一着で間に

合うだろうと思われた。

「たしかに、将来をよく見通してものごとを進めた校長先生であつたすな」

と戸松勇治（3期、山本町教育委員）。柴田雄四郎（1期、元琴丘鹿渡小校長）は、武藤校長が朝礼などで強調した次のことばが好きだった。

「ギリッとふんどししめる」
故人となつた武藤校長の写真を自宅の仏壇にあげ、渡辺一郎（1期、元能代浅内小校長）はきょうも手をあわせる。偉大なる恩師であつた。（敬称略）

